失敗経験対処行動の尺度構成の試み

○李 裕美

(関西大学大学院心理学研究科)

キーワード：失敗経験 対処行動 尺度構成

Scale Construction of Coping Behavior toward Failure Experience

Yumi LEE

(Graduate School of Psychology, Kansai Univ.)

Key Words: Failure Experience, Coping Behavior, Scale Construction

目 的

失敗を経験した際、どのような対処行動をとるのかについて、記述調査に基づく研究はみられるが(李, 2011; 李・田中, 2011), 実証的な研究は見当たらない。よって, 本研究では, 失敗経験時の対処行動を測定できる尺度の構成を目的とする。

方 法

調査協力者 2013年10月から11月にかけて, 関西圏の私立K大学で調査を行い, 515名のデータが得られた(男性283名, 女性216名, 性別無記入16名)。平均年齢は19.69歳($SD=1.18$)であった。

調査項目作成 尺度の項目を構成するために, 李(2011)のSCT形式の失敗経験対処様式テストによる自由記述データを参考にし, 母集団と特定した。それらをKJ法の手法に基づいて分類し, 各カテゴリを項目にまとめた。

質問紙の構成 「失敗経験対処行動」尺度として, 最終的に59項目が構成され, 5件法で回答を求めた。

分析項目 59項目それぞれについて515のデータの得点の分布を中心に項目の分析をした。そこで, 天井効果のあらわれた5つの項目とダブルコーディングと判断される1つの項目などを削除し, 53項目を分析の対象とした。

結 果

53項目について, 探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。最終的に26項目について4因子構造が確認され, 各因子の内的整合性を確認するためにクロンバックの α 係数を用いた信頼性の検討を行った(表1)。

また確認的因子分析を行ったところ, 単純構造の適合度指標は $GFI=.835$, $AFGI=.802$, $CFI=.802$, $RMSEA=.076$ であり, 許容できる適合性を示し, モデルの妥当性が確認されたと判断した。

考 察

第1因子については, 失敗を振り返り, 展望の行動をして努力を継続するという, 失敗したにもかかわらず目標に向かって前進する行動といえよう。これらの意味を考慮し, 第1因子は「克服に向けての積極的対応」とする。

第2因子については, 失敗経験によるネガティブな反応で構成されているといえる。該当の事柄を中断するか継続可否を再考する行動があらわれるが, それとともに意欲低下の伴う消極的対応が目立つ。ネガティブな感情も自己防衛的な対応もみられる。これらの意味を考慮して, 第2因子は「消極的対応・中断」とする。

第3因子については, 一見ポジティブな反応とみられる余地があるだろう。しかし, 失敗は「当初の目的達成につながらない, あるいは望ましくない結果が生じること」である(池田・三沢, 2012)。にもかかわらず, 第3因子に割り当て

表1 最終26項目での因子分析結果 ($N=515$)

項 目	因 子			
	1	2	3	4
第1因子 ($\alpha=.873$)				
そのときのやり方を見直す	.782	.169	.037	-.057
今度はよりよくいくように改善する	.765	-.017	-.048	.004
再度失敗しないように努力する	.731	.141	-.016	.049
何が悪かったか考える	.683	.097	-.081	-.043
次に向けてまた頑張る	.671	-.101	.211	-.002
それをなんとかしようとする	.646	.007	-.058	-.053
もっと努力する	.619	-.089	.131	.053
心を改めて真剣にやり直す	.534	-.009	.050	.068
それでも努力をし続ける	.512	-.164	.145	.055
第2因子 ($\alpha=.788$)				
やる気なくなる	.066	.645	-.099	.050
そのことはあきらめる	-.169	.626	.100	.013
そのことはやめる	-.158	.618	.192	.020
続けるかやめるか考える	.134	.583	-.006	-.066
その失敗が嫌になる	.312	.546	-.336	-.037
しぶしぶやり直す	.063	.527	.087	.030
そのときの目標を下げる	.001	.507	.005	.099
言い訳を考える	.027	.505	-.036	-.104
一応やり直すが適当にする	-.261	.426	.264	.061
第3因子 ($\alpha=.669$)				
それを気にしない	-.254	.073	.680	-.075
その失敗を前向きに考える	.165	-.180	.597	-.030
それでもゆっくり気楽にそれ続ける	.158	.070	.501	-.029
仕方ないと思う	.005	.137	.495	.053
気持ちをさりかえる	.327	-.002	.449	-.003
第4因子 ($\alpha=.761$)				
どうしたらいいか周りに相談する	.017	-.005	-.048	.867
周りに意見やアドバイスをもらう	.055	-.107	.010	.816
周りに頼ってなんとかしようとする	-.080	.218	.012	.516
因子間相関				
1	—			
2	—	-.432**		
3	—	—	-.179**	
4	—	—	—	.082

** $p<.001$

註) 全項目は, 文頭の「私は失敗をしたら, 」が省略されている。

られた内容を見ると, 失敗そのものを認めない, 自己防衛的な合理化や回避の意図が込められていると解釈できるので, これを「自己防衛的合理化」とする。

第4因子については, 社会的な助けを求める行動とみられる。よって, 第4因子は「社会的な援助要請」とすることができる。

引用文献

- 池田浩・三沢良 (2012). 失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, **60**, 367-379.
- 李裕美 (2011). 日本の青年の自尊感情 (2) —仮想的有能感と被害受感・被拒絶感, 社会的スキルとの関連及び失敗経験対処様式の作成— 調査— 関西大学大学院心理学研究科『心理学叢誌』, **5**, 1-9.
- 李裕美・田中俊也 (2011). 青年の失敗経験対処様式分類の枠組み 日本教育心理学会総会発表論文集, **53**, 200.